

第3セッション総合討議

マリア・デ・プラダ氏に対し谷川恵一氏から「西洋文化と出会った日本人文学者は、鷗外にかぎらず大勢いると思うが、その中で鷗外をどのように位置づけるのか。西洋と出会った全ての日本人は、いわゆる〈自我の死〉をとげるのか。他の作家を視野に入れてのお考えを聞かせていただきたい」との質問があった。

マリア・デ・プラダ氏は次のように回答された。

自分が興味を持ったのは、〈自我の死〉によって、その文学がどうなってしまうのかという点である。近代の作家の中で、こういう体験をしたのは鷗外だけのように思うので、彼をとりあげた。だから〈自我の死〉ということが、だれにでもあてはまるとは考えていない。

日本の「自己」にしても西洋の「自己」にしても、自分の生まれた社会・文化の中での、狭い不確かな自己でしかないと思う。この狭い自己を基盤になにかを語ったとしても、たいしたものとは思われない。鷗外は〈自我の死〉を経験することによって、西洋、日本という地点を超えた思想を現すことができた。そこに興味を持った。このように普遍的なところに至った作家としての視点から鷗外を扱いたい。

また、今西祐一郎氏から、鷗外は哲学者としてよりも批評家・評論家として捉えられるのではないかと、との質問があり、マリア・デ・プラダ氏は、そういう見方も悪くないと答えられた。

ミコワイ・メラノヴィチ氏が、「哲学」という言葉よりも「思想」という言葉の方が適切ではないかと、また、結核という作家自身の問題も重要だが、高村光太郎などのように病気の妻の存在が文学を形成した場合もあって、張建明氏の発表は興味深かった、と述べられた。